第2回 2030年の「心豊かな」ライフスタイル

未来のあたりまえを考える

モノづくり日本会議(事務局＝日刊工業新聞社)のネイチャー・テクノロジー研究会は27日、東京都新宿区のDNP市谷田町ビルで第2回「2030年の『心豊かな』ライフスタイル」コンテストの表彰式を行う。応募総数317件から選ばれた優れた作品14件に大賞、優秀賞、審査委員長賞、協賛企業各賞が贈られる。いずれの作品も、厳しい環境制約条件のもとでも〝心豊かに〟過ごすライフスタイルが描かれている。表彰式は研究会のシンポジウム(共催日刊工業新聞社、大日本印刷)の中で開かれる。

モノづくり日本会議
―モノづくり推進会議NextStage―

■講評

審査委員長　石田 秀輝さん
ネイチャー・テクノロジー研究会コーディネーター
(地球村研究室代表、東北大学名誉教授)

自然・技術・心のつながりを〝かたち〟に

第2回となる今年も、4歳から70歳を超える多くの方々から応募を頂いた。大賞の「シニア・マイスター・ハウス『匠マルシェ』」は、じいちゃん・ばあちゃんの両脇を若者が支え(匠の)技を宝物にしようというもの。定年という概念が希薄になる可能性が高い2030年に、高齢者の知恵や技が生かされ、そんな人たちが小さなコミュニティーを創り、それを若い人たちが支えてゆく―そんなイメージで読ませて頂いたが、何だか想像するだけでワクワクしてくるような作品である。

優秀賞の「音の振動で心豊かに」は自然や人工の音をエネルギーに変えようという提案であるが、会話もエネルギーに変えることで、お年寄りも会話や外出が楽しくなるという小学生からの提案である。単にエネルギーを創るのではなく、そこに人の笑顔が生まれるという、とても素敵なアイデアである。審査委員長賞には「環境問題を解決してくれる便利な技術から、一緒に環境問題に取り組んでくれる技術へ　～主体性の変遷～」が選ばれた。利便性のみを追うテクノロジーから人との関わりを持つテクノロジーの新しい価値創出に一石を投じた作品といえる。

そのほか、薄いけれど大量にある自然エネルギーを楽しみながら創り出したり、当たり前が幸せであったり、お隣さんやご近所さんが技や自然と関わりながらつながっていたりと、受賞されたすべての作品に共通するものは、自然に生かされていることを知り、自然を活かすことを楽しむ、あるいは、懐かしい過去にあったものを、もう一度2030年型に再編するものであるように感じた。

今回残念ながら選に漏れた作品を含め、応募作品には、コンピューターやロボットがすべてのものを自動的に処理してくれたり、バーチャルでいろいろなことを楽しんだりといったアイデアは皆無であった。少なくとも、心豊かなライフスタイル創成の根底を流れる概念は共通して単に科学技術の粋を集めたようなものではないことを感動とともに改めて認識させられた。それは、環境の世紀といわれる21世紀に求められている、新しい文明創出の予兆であるような気もしている。そして、この予兆こそが今最も重要なメッセージであることをしっかりと受け止め、厳しい環境制約の中での心豊かな暮らし方の〝かたち〟として社会に発信していかねばと思う。

講評

審査委員　小池 一子さん
(クリエイティブ・ディレクター)

自分なりの感性・視点が不可欠

2014年に2030年のライフスタイルを考える。とても難問のように思えるが見回せばこの情報時代にはかなりのヒントもあふれている。でもそこのところが実は問題。

エコロジーは、エネルギーは、エコノミーは、サステイナビリティーは、と調べたり他人のアイデアを見たりしているうちに「あなたの提案は他の人と同じよ。言葉も絵も似通っている」と指摘したくなる案が今年は多く見受けられた。

大賞を筆頭に賞の対象となった14の作品はそのような落とし穴には無縁の、自分の感性や視点を通過させた方々のもので、すばらしいと思う。ライフスタイルの考察の根底には、人は「助け合う」「ものを作る」「受け継ぐ」という三つの言葉を私は置いている。大賞作品の「匠マルシェ」の中にその三点を強く感じた。優秀賞の「音の振動」、審査委員長賞の「主体性の変遷」、それぞれに強い共鳴を感じている。

子供たちもシニアもともに未来の地球と生命のために考えることができるこのコンテストは他の国々にも伝えたい企画である。

審査委員　涌井 雅之さん
(東京都市大学教授)

共通認識化する主体的行動の重要性

第2回を迎えた今回のコンテストに興味深いある種の傾向が表れた。素晴らしい発想は受賞提案に代表されるが、それとは別に多くの応募された方々に共通して表れた提案の領域に興味を強く引かれた。具体的には「高齢者の叡智や力を宝物として社会を近隣・家族のつなぎ手として自然の価値を見直そう」「エネルギー問題を他人事と片付けないで自分や自分たちの問題として考えよう」といった方向に大方の提案が結集されていたことだ。

この傾向こそ、社会人の方々からお子さんまでもが、持続的な未来のために真剣に社会のありようを自分の問題として捉え、深刻に受け止め、自らのライフスタイルを問い直そうとする真摯な姿勢が多くの方々の共通認識になりつつあることを示しているのではないか。また、そうした社会を実現するための方策について、知恵を絞った具体性のあるアイデアを数多くの方々から提案頂いたことにこそ価値があると思う。大変うれしく身震いするほど感動を覚えた。

そこには今我々が克服せねばならぬ未来への課題が如実に表れている。多くの人々の間に、現代社会の今というポイントの重要性が正確に認識されていることに感動し、提案の多くが単に夢を描いているのではなく、今という時代を文明の重要な分水嶺と捉え、自分を主役としてどのような行動を選択するべきなのかという真摯なメッセージの表れとして受け止めさせて頂いた。

審査委員　下村 政嗣さん
(千歳科学技術大学教授)

〝日本人の自然観〟を忘れずに

審査会の直前に、クラウス・アウアー駐日ドイツ公使の「ドイツにおけるエネルギーシフト」についての講演を聞いた。ドイツ人のライフスタイルや環境観が、脱原発の決断や2020年までに再生可能エネルギー比率を20%アップする「EU―環境目標20―20―20」の背景にあることは確かだ。

風力のみならず、「音」や、ダイエットで生み出される「人のエネルギー」も再生可能エネルギーになるのかも。

「マイスター」はドイツ発祥の職人制度、ドイツ人は「技術」を生み出す「人」と「コミュニティー」を大事にしてきた。

「星空」のきれいな「風と水と緑」に囲まれた「自然やいきものと一緒に暮らす」街では、「体験をわかちあう場」で「心豊かな会話」がはずみ、老若が互いに「暮らしのサポート」をする。旬のものを旬に食す「あたりまえ」さが、日本の伝統である「間と余白」の文化の背景にあった。

「技術」は便利な世界を与えてくれた。技術だけが環境を守るのではなく、「人」と「コミュニティー」の意識が環境を守るのではないだろうか。ドイツ人と日本人の自然観は微妙に違うようではあるが、目指す未来は同じである。〝日本人の自然観〟を忘れそうになってはいないだろうか？

審査委員　中井 徳太郎さん
(環境省大臣官房秘書課長兼大臣官房政策官)

環境・生命文明社会の夜明けを実感

第2回のライフスタイルコンテストは、すばらしいアイデアの作品ばかりで大変充実したものとなった。特に印象深かったのは、応募者が抱く未来の社会像に大きく共通するイメージが形成されているということである。それはこれまでの化石燃料・地下資源に頼った大量生産・大量消費を前提とし、人と人、人と自然のきずなが失われた物質文明社会ではなく、自然・再生エネルギーに支えられ、人と自然のいのちがいきいきと輝いている真に持続的な社会が実現しているというイメージだ。

小さな子供から20代の若者、働き盛りの40代、80代の高齢者まで幅広い応募があったが、このイメージは各世代で共通していると感じた。生活空間に緑や水や自然があり、人が動植物とともに心豊かに暮らしている社会、情報通信技術(ICT)をはじめ最先端のテクノロジーを手中にしながら、単なる便利さを求めるのではなくむしろ自分の体を使って健康とエネルギーを手に入れる社会、それぞれの世代の一人ひとりの個性や技が輝いてつながりを実感でき、何ともなつかしい感じがする社会である。環境省では、このような目指すべき社会を「環境・生命文明社会」と名付け、その創造に向けての政策展開にかじを切っている。今回のコンテストは、まさしく「環境・生命文明社会」の夜明けを実感させてくれるものであった。

豊田鉄工　モノがつながる暮らし賞

コミュニティガレージ

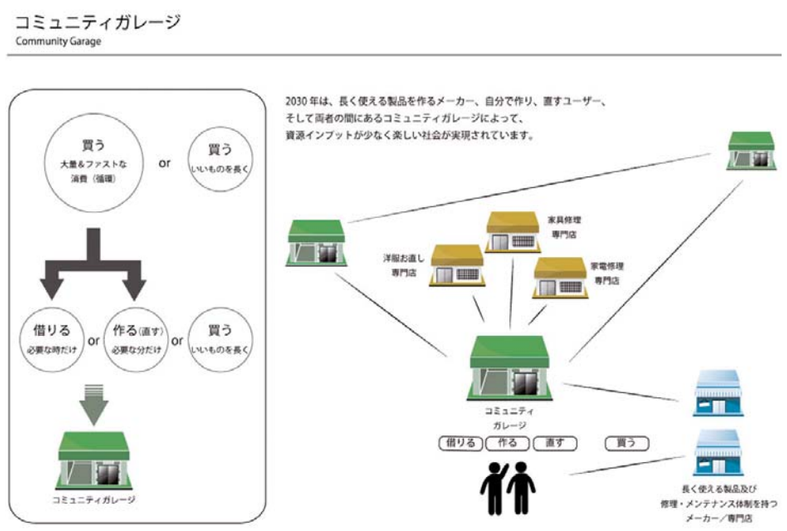
●森本 康平さん(兵庫県尼崎市、34歳)

資源・エネルギー価格の高騰に伴い、従来の大量＆ファストな消費に替わり、「いいものを買って長く使う」「必要な時だけ借りる」「自分で作る／直す」という消費スタイルが主流となっています。そして、そのような消費スタイルをサポートする「コミュニティガレージ」が各地域に展開されています。

ガレージには地域住民の特性に合わせた製品が保管されており、利用者はネットで予約し、受け取りに行きます。在庫は各ガレージ間で共有されており、他のガレージから取り寄せることもできます。なお、取り扱われる製品は耐久性やメンテナンス性などロングライフ性能を基準に選定されており、運営者によって適切に管理・メンテナンスが行われています。

また、ガレージには簡単な加工機械を備えた工作スペースがあり、自分でモノを作ったり、修理したりする人もいます。そこでは、自作や修理に必要な材料やパーツを必要な分だけ購入することができます。また、近所に住む様々な技術を持った人や、製品カテゴリごとのファンコミュニティの情報が登録されているほか、専門の業者への窓口にもなっています。

2030年、人々はこのようにコミュニティガレージをうまく利用し、資源インプットが少なく楽しい暮らしを実現しています。



日本リファイン　資源循環ネイチャー賞

暮らしを創造する楽しさとサポート

● 伊奈 史朗さん
(名古屋市緑区、66歳)

「おじちゃん、ズック直して！」「いらっしゃい！ハナちゃんがデザインしたズックだね。身体も大きくなって履きづらくなったかな。お父さんは」「お家の壁の模様替えをしてるよ」。昔も下駄屋でお客さんの足に合わせて鼻緒のすげ替えをしてくれるおじさんがいました。その人に合った物を丁寧に作ってくれる様子を見ていると具合が悪くなったらそのお店で直して貰い、いつまでも大事に使おうと思う心が芽生えます。そして自分がデザインした物だからより愛着も湧いてきます。ハナちゃん達は近くの里山で集めた植物のツルでかごを作って遊びながら自然の循環を学びます。この街では身の回りのモノを創って楽しむ暮らしがあり、それを手助けする循環システムがあります。家庭から出る金属や樹脂など自然に戻せない不用品を部材ごとにストックし必要に応じて購入できるセンター。企業は地震や衝突等に優れ組立・分解し易い構造体を造る事で、自由に物作りが楽しめます。

YKK AP　ハッピーライフ(HAPPY LIFE)賞

星空のきれいなまち

●森 悠仁さん・あづささん
(大阪府河内長野市、4歳・31歳)

自分の家で使う電力は自分の家で発電、蓄電できる。だから町には電柱も電線もなく、空を見上げる時にじゃまなものが何もないんだ。

電灯も足もとの低いところにほのかにあたたかく光っている。町のみんなもこの星空が大好きでほこりに思っている。衣食住使うものは必要なものを必要なだけ大事に使うことが当たり前になった町。だれもが「幸せありがとう」ってにっこり笑っているよ。